

アルパック ニュースレター

VOL.116

発行 /2002年
11月1日

ISSN 0918-1954



「北はりま田園空間博物館」がオープンしました（本文中に関連記事があります）

目次 contents

-
- ・京都市都心部の新しい建築ルール案の紹介 2
 - ・メディア・アートが名古屋のまちに飛び出した 4
 - ・「北はりま田園空間博物館」がオープンしました 6
 - ・市民運営のリサイクルプラザを目指した
門真市の取り組み 7
 - ・「LRTによる都市づくりに関する講習会」が
開催されました 8
 - ・きんきょう 9
 - ・メディア・ウォッチ 13
 - ・まちかど 14

京都市都心部の新しい建築ルール案の紹介

—「職住共存地区」のまちなみ保全・再生—

[京都事務所／松本 明]

大きく変わりつつある京都の都心部

四条通や烏丸通、河原町通など東西3本、南北3本の計6本の幹線道路沿い街区（通称「田の字地区」、商業地域・容積率700%）は、京都市都心部の商業・業務機能等が立地する場所ですが、これに囲まれた地区（商業地域・容積率400%）は、「職住共存地区」（面積約130ha）として位置付けられ、京都らしいまちなか型産業と多様な都心居住が共存する地域としての再生が目指されています。

ここでは、これまで三条通のかいらい景観整備、修徳、本能学区での「地域協働型地区計画」の指定、姉小路通の住民主導の建築協定、「歩くまち・京都」に向けたイベント「まちなかを歩く日」の実施、伝統的な町家を再生・活用した魅力的な店舗群の創出など、多彩な取り組みが生まれ、地域イメージも大きく変わろうとしています。

しかし、近年、バブル期を上回るペースでマンション建設が進んでおり、空洞化の一途をたどった都心部人口は増加に転じたものの、居住環境とまちなみ景観の両面で大きな問題が発生しています。

そこで、京都市では、昨年度15名の学識経験者からなる「京都市都心部のまちなみ保全・再生に係る審議会」を発足、今年5月の審議会提言※を受け、その具体化に向けた新たな建築ルール案が作成されました。現在、住民説明会と意見募集を実施中であり、来年度の早い時期の新ルール実施を目指しています。

どのようなまちなみ問題か

少し遡りますが、バブル期のピーク前、昭和62年の建築基準法改正で、道路斜線制限制度が緩和され、前面道路が狭い京都市都心部でもセットバックすれば高い建物が建てやすくなりました。その結果、まちなかでのマンション建設が加速され、日照やプライバシー阻害等の居住環境問題、連続したまちなみ景観の喪失などの問題が噴出したのです。

その他、1階部分が住居もしくは駐車場となる居住専用マンションの場合には、都心部らしいまちのにぎわいやかいらいの連続性を希薄化する結果を招くものといえます。

これらに対応するため、今回、京都市独自の新しい建築ルール案がつけられたのです。

マンション建築ルール案の3つの内容

新ルール案は次の3つで構成されています。

(1)高度地区の工夫

京都市では全国でもまれに見るきめ細かい高度地区指定がなされています。職住共存地区では現在31m高度地区が指定されていますが、この高度地区を工夫し、前述したセットバックによる道路斜線緩和措置を無くすとともに、高さ20m以上部分についてセットバックの義務化や隣地斜線制限を強化することにより、まち通りへの圧迫感の削減や周辺の居住環境の保全をねらっています。

(2)特別用途地区の指定

マンション1階部分への都心部らしい店舗や業務機能の誘導をねらいとして、住居専用マンションについては容積率300%までとし、それ

を超える容積率の建物を建てる場合には店舗等の併設が必要となります。

(3)美観地区の指定

伝統的な町家等によるまちなみ景観に配慮したマンション等を誘導するため、新たに美観地区を指定し、12 m以上の高さの建築を行う場合には、京都らしいまちの表情づくりに向け、ファサードデザインの誘導等を図ることになります。

今後の見通し

今回の新ルール案は、住民や都心部らしい営業を営む方々にとっては、一つの朗報といえると思います。

また、マンション供給サイドから見れば相当な規制強化となりますが、都心部に立地するマンションのほとんどが京都の歴史的地名を冠し、関西以外も含めたユーザーに対して「京都らしさ」をチャームポイントにして販売してい

ることを考えれば、息の長い魅力的なまちづくりに向けた今回の新ルールに対しては案外賛成が多くなるかも知れません。

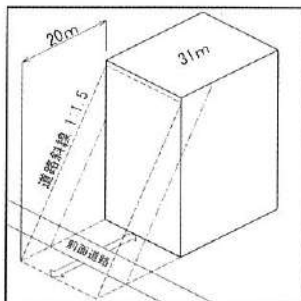
なお、既存マンションのうち、新ルールに合致しないもの（いわゆる既存不適格）が多数発生しますが、これらについては何らかの緩和策を検討中とのことです。

まだ続きそうな気配のマンションブームですが、今後は、「より魅力的なまちづくり、まちなみづくりに貢献するマンション」に向けて、新しい建築ルールとその思想に即したマンション供給サイドのデザイン力が試されることとなると思います。また一方では、それをチェック・評価する住民の目がますます重要になると思います。

（※京都市都市づくり推進課ホームページ参照）

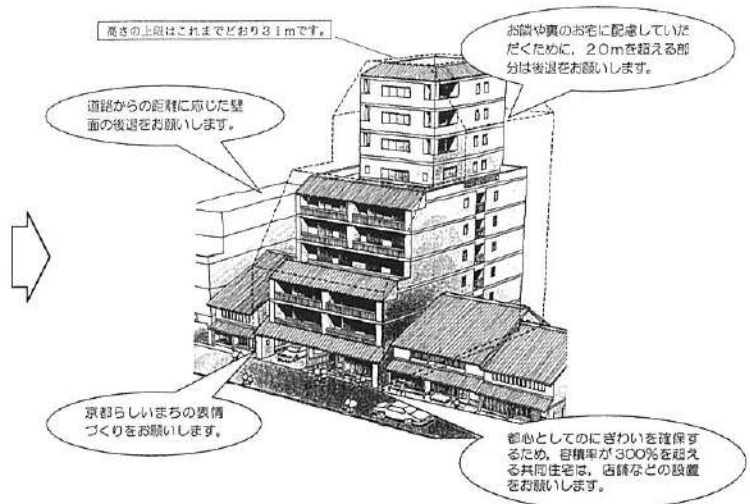
URL：<http://www.city.kyoto.jp/tokei/todu/index.htm>

従来



これまでのルールで建てられた例
(セットバックにより斜線規制が緩和される)

京都市都心部の新しい建築ルール案



メディア・アートが名古屋のまちに飛び出した

〔名古屋事務所／安藤 謙〕

名古屋栄の都心のど真ん中に出現した栄公園、通称「OASIS 21」が10月11日にオープンしました。地下広場中央部に20m×40mのイベントコートを持ち、その周りには地下街につながるように店舗が配置されています。公園東側の半地下にはバスターミナルがあり、地上は芝生等の広場が、広場中央部には水の宇宙船という地上4～5階の高さがあるモニュメントがあり、人が上って回遊できるようになっています。

このOASIS 21において、ISEA（電子芸術国際会議）NAGOYAの自主企画イベントである『野外メディア・アート展— alternative moments 「新しい瞬間」』を10月25日から30日にかけて開催しました。

参加したアーティストは、名古屋から5名、イギリスから2名です。名古屋のアーティストは、これまで国内外のメディア・アート展でグランプリ等各賞を受賞した方々です。

10月25日は、18時から場所と音楽をテーマとして活動するARch（アーキ）の横井和也さんが、OASIS内の映像を加工してスクリーンに投影しながら電子音楽ライブを行いました。26日から30日は、水の宇宙船の上で愛知県立芸術大学の石井晴雄さんが「ファイアーサークルver2」として、水面の上に直径17mの円形に配置されたスピーカーとライトを使い、音と光を回転させたり点滅させたりするもので、参加者がコントロールすることもできます。

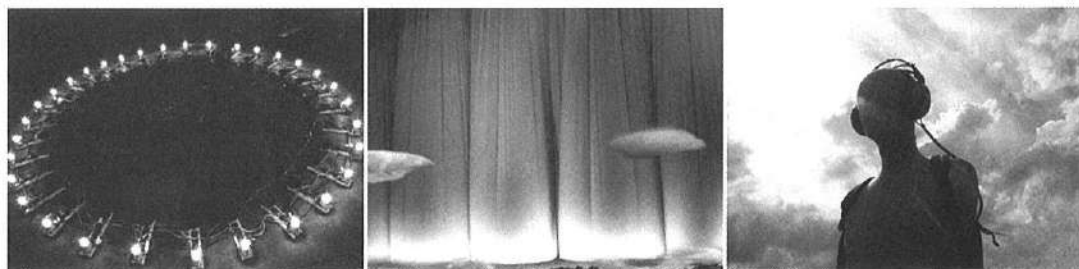
IAMAS（情報科学芸術大学院大学）の前林明



次さんは「ソニック・インターフェイス2」として、ヘッドホンを付けバックパックでパソコンを背負って歩くと周囲の音を拾い時間差でパソコンにより音が増幅されたりするもので、奇妙な感覚を味わえました。大同工業大学の樫田珠美さんと名古屋造形大学の吉岡俊直さんは、4m×6mのスクリーンで映像作品を投影しました。また、イギリスのフォンブック・リミテッドは、最新の携帯端末を使い映像作品を配信しました。

メディア・アートがまちに飛び出した企画でしたが、光を使った作品は周囲のネオンや通路・店舗の光と競合し単独での面白さが弱まる難しい空間でした。けれども、それら作品が街角の日常的な空間にあるとき、イベントまでの調整の難しさやトラブルを忘れさせ、少し心がほっとして楽しいような気分になる時間と空間を与えてくれました。

見学者や参加者は必ずしも多くはありませんでしたが、ISEAの実行委員長茂登山清文先生の、「アートはまちを元気にする」という言葉が何となく頭に浮かんでいます。



アジアで初の電子芸術国際会議を開催

10月27日から31日まで、短い期間でしたが、名古屋でアジア地域初の電子芸術国際会議2002名古屋「往来」が開催されました。会議の英文名称11th International Symposium on Electric Art, NAGOYA JAPAN [Orai] を略してISEAと言います。今回は11回目、前回は2000年にパリで開催され、そこで名古屋への誘致が決定されたのです。

茂登山清文先生始め実行委員のみなさんや名古屋市職員の方々と一緒にアルパックの安藤、尾関が誘致の準備に参加したのはパリ会議のほぼ1年ほど前、まだ20世紀だった頃でした。他の国際会議誘致例と比べると準備の余裕は決して十分ではなかったのですが、かつて名古屋のアートイベントとしては世界にも知られたアーテックの実績やこのジャンルの作家が多数おられることが誘致の支えとなり、無事、誘致することができました。

会場は名古屋港を中心に市内各所で

会議のオープニングと基調講演などは栄ナディアパーク・デザイン棟のアートピア・ホールで行われました。私たちの事務所のあるビジネス棟の隣です。引き続き国際会議は名古屋港にある港湾会館で行われ、同時にこの数年、倉庫の再利用をアート・ポートとして実験している名古屋港東埠頭の4号、20号倉庫で作品展示が行われ、この他市内各所で様々なプログラムが実施されました。

この会議の自主企画としてオープン間もない栄公園OASIS21で25日から30日まで取り組まれたアートプログラムが前段で安藤が紹介しているものです。

電子芸術は分かりやすく楽しくなってきた

電子芸術と言うとなにやら難解な芸術と思わ

れる方が多いかもしれません。一昔前には確かに至極単純な繰り返しだけれど難解な映像作品が多かったように思います。そういう方にこそ是非一度、最近の電子芸術作品をご覧になっていただきたいと思います。意外性は強いけれど、それが面白く分かりやすい作品、心地よい作品が増えています。

あえて分かったような解説をするならば、電子技術を表現手段のメディアとして使った視覚+聴覚+触覚、場合によっては嗅覚をも融合したインタラクティブな作家と視聴者の相互参加・交流型の実験芸術とでも言えましようか。コンピューター、しかも子供からお年寄りまで誰もが簡単にマウスやキーボードで操作できるパソコンがなければこういう表現は不可能だっただろうと思います。

現物をお見せできないのが残念ですが、このような電子技術を使ったアートワークの展開から、国境や言語、男女、年齢、様々な障害、実用と遊と言った壁を越えて、芸術から科学あるいはライフスタイルへの新たな刺激を予感するのは私だけではないでしょう。

芸術は未来を予振する—アンドレ・ブルトン

〔天地往来〕と題して行われた基調講演での幸村真佐男実行委員会会長の結びがブルトンのシュールレアリズム宣言から引用された表記の言葉です。シュールレアリズムは20世紀半ばの芸術運動ですが、その是非や好き嫌いとはともかくとして、芸術が未来を予振すると言うメッセージには、共感せざるを得ません。

「北はりま田園空間博物館」がオープンしました！

〔大阪事務所／畑中 直樹〕

去る9月7日、8日に兵庫県の真ん中あたりに位置する北はりま地域で、田園空間博物館がオープンしました。これは、北はりま地域の有形・無形の資源を展示物に見たてて、地域全体をまるごと博物館（エコミュージアム）にしようとするものです。平成11年度から地域の方々を中心となって準備が進められ、その運営を行う特定非営利活動法人（NPO法人）の設立や展示物（サテライト）の募集・認定などが進められてきました（現在の正会員数：約100名）。今回は、その総合案内所（コア）の開設にあわせてオープニングメインイベントが開催され2日間で約15,000人の来場がありました。その様子を少しご紹介します。

ちょっと一味違います

一見するとふつうの地域おこしイベントですが、その企画から準備、当日の運営までNPOとサテライトのメンバーが中心となって、行政はあくまで裏方にまわり行われました。皆さん胃の痛くなるような日々だったと思います。

式典は最小限に

同様の理由で、式典は最小限のものでした。おまけに途中にわか雨が降り、さらに短縮されてしまいましたが・・・。

170のサテライト・体験コーナーが一同に

メイン会場内にサテライトテント村が開設され、現在登録されている（年会費あり）170のサテライトに色々な形で触れることができました。神楽の獅子や天狗が会場内の子供たちを驚かしてまわるといった趣向もありました。

大好評のヘリコプター遊覧飛行

地域の方々に自分達の住んでいるまちを空から見てもらおうと企画され、有料でしたが2日間ずっと満員、延べ422人もの方が飛ばれまし

た。定員5名ですから100回近く休みなくメイン会場のそばで離着陸を繰り返していたわけで、パイロットの方も大変だったことでしょう。

阪神間、姫路、淡路からの北はりまサテライト巡りバス

県内各地域から総合案内所経由で各サテライトを巡るバスも企画され約100名の方が利用されました。これは、すでに昨年度3回ほど試行されたもので、昨年バスガイドをやった私に前回の写真を持ってきてくれた常連さんもおられました。

大満員の特産品販売コーナー

紙面での具体の数字の公表は控えさせていただきますが、NPOが企画・運営している特産品販売コーナーは大好評でした。初日、運悪く1時間ほどの停電のトラブルがあり、POSシステム（販売時点情報管理）が止まって手作業で対応するというおまけもあり、2日目終了後の会計事務が大変でしたが。

変身願望のよさこい踊り？

メインステージでも色々なプログラムが用意されましたが、今あちこちで流行っているよさこい踊りは盛大でした。参加者を見るとまさに老若男女とは、このことだと思いました。また、きっと変身願望に流行るその本質があるのではと思いました。

日本一長い散歩道（総延長169km）

日本一長い散歩道を活用したサイクルラリーやウォークラリーが行われました。12万人のかごめかごめ大作戦も継続実施中です。

※なお、サブイベントも引き続き1市4町ごとに色々なプログラムで継続開催中です。

<問い合わせ先>

北はりま田園空間博物館総合案内所
（道の駅：北はりまエコミュージアム）

〒677-0022 西脇市寺内字天神池517-1

TEL：0795-25-2370

URL：<http://www.k-denku.com>

市民運営のリサイクルプラザを目指した門真市の取り組み—NPO法人リサイクル活動機構かどま設立まで—

〔大阪事務所／後藤 久美子〕

平成14年4月門真市リサイクルプラザがオープンしました。このリサイクルプラザの大きな特徴の一つは施設のプラザ部分の運営を「NPO法人リサイクル活動機構かどま（平成14年8月法人格を取得）」が行っていることです。

門真市ではリサイクルプラザの整備にあたり、多くの市民に利用してもらえる施設を目標に、市民参画による自主的・自律的な運営を目指しました。この施設を運営する市民組織をつくるために、平成12年度、「門真市リサイクルプラザ運営機構発足準備会（以下「準備会」という。）」を立ち上げ、運営機構のあり方、リサイクルプラザにおける事業運営の基本方針を検討していきました。アルバックではリサイクルプラザ活動機構の事業計画策定支援業務の委託を受け、このプラザ準備会の設立から、平成14年度のリサイクルプラザオープンまでの約2年間、市民組織の成長を市民と共に見つめてきました。

準備会は運営の他に施設オープン後の工房事業やイベント事業、啓発・広報事業等のスタッフとして活動を担う市民の育成のために各事業部会も発足し、全員で会議を行い運営機構設立の準備を進めていきました。そうした全体会議において市民の手で運営することを目的に検討を重ねた結果、運営組織は特定非営利活動団体として法人格の取得を目指すことになりました。運営や工房事業のスタッフとなるために集まったメンバーは、NPO法人各取得という業

務も加わり、リサイクルプラザオープンまでに申請をするという厳しいスケジュールで準備を行いました。その間に、運営部会は他都市のリサイクルプラザに運営研修に出かけ、イベント部会はプレイベントとしてフリーマーケットを開催、広報部会は準備会会報を発行、工房部会は工房の指導者になるために、織り、染め、陶芸、石けん、自転車修理などの研修をそれぞれに積んで、プラザオープンに備えました。

ところで、NPO認証申請手続きについては、設立認証申請書及び定款や設立趣旨書等の添付書類を整える作業になりますが、「リサイクル活動機構かどま」の場合は設立マニュアル本により作成した書類について府の担当者にチェックをいただくという作業を繰り返し、書類を完成させ、申請に至っています。

4月以降、スタッフとしてメンバーは活動しています。プラザの運営にはまだまだ課題があるようですが、メンバーは市民運営の意義を自覚し頑張っています。是非一度、「門真市リサイクルプラザ（エコ・パーク）」でリサイクル体験をしてみてください。

<門真市リサイクルプラザ（エコ・パーク）>
所在地：門真市深田町 19-5

問い合わせ先：06-6909-4431（エコ・パーク事務局）



工房研修風景

「LRTによる都市づくりに関する講習会」が開催されました

〔大阪事務所／森脇 宏〕

LRTとは何か

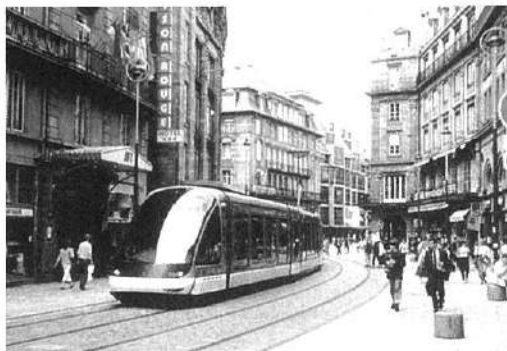
LRTとは、ライト・レール・トランジットの略で、厳密な定義はありませんが、現代版路面電車とも称され、路面電車を基本に、車両、運行システム、他の交通機関との連携等、世界中で様々な改良が行われています。そして近年、世界中の都市公共交通で実現化したプロジェクトの大部分はLRTであると言っていいほど、大きな評価を受けています。

LRTが評価されているのは、中心市街地の活性化、環境負荷の軽減、バリアフリー、ストック活用等のまちづくりの課題を考えると、自動車に依存したまちづくりに限界があるため、空間効率やエネルギー効率が優れ、事業費も比較的安く、路面から簡単に乗降できる路面公共交通（その代表がLRT）が、都市交通として大きく見直されてきているからです。世界中の事例を見ると、中心市街地のトランジットモール（LRTだけが通れる歩行者専用道路）は、快適で歩きよいことから賑わい、低床車の導入で乳母車や車椅子もスイスイ乗降でき、郊外の鉄道との相互乗入で、郊外と中心市街地が乗り換えることなく結ばれるなど、多くの効果を発揮しています。

こうした大きな可能性を持っているLRTですが、日本では既存の路面電車の部分延伸や低床車導入は進みつつありますが、新たなLRTは実現化できていません。

講習会の概要

以上の問題意識から、LRTがまちづくりに果たす役割や、LRT実現化の戦略等を研究す



斬新なデザインのLRT/ストラスブール（仏）
るため、(社)土木学会関西支部の中に「LRTによる都市づくりに関する調査研究委員会（委員長：塚本直幸大阪産業大学教授）」が設置され、2001年度から2ヵ年間、調査研究が進められました。今回の講習会は、その成果を報告し、幅広い視点から深めていただくことを目的に、10月11日、大阪市内で開催されたものです。参加者は、北は北海道から南は鹿児島まで、文字通り全国各地から、行政関係者、市民団体、交通事業者、大学の研究者・学生など、約160名が集まりました。なお、私は、この調査研究委員会の事務局を務め、講習会の企画・準備もお手伝いさせていただきました。

講習会のプログラムは、概ね次のとおりでシンポジウム的内容とし、参加者アンケートによると、比較的多くの方から、「中身の濃い内容であった」と評価していただいています。なお、当日のテキストは販売していますので、ご希望の方は、(社)土木学会関西支部にお問い合わせください。(tel:06-6271-6686、<http://www.jscekc.civilnet.or.jp/>)

<概略のプログラム（敬称略）>

■成果報告／(1)「LRTによる都市づくりへの効果」塚本直幸（大阪産業大学）、(2)「LRTの成立可能性」中川 大（京都大学）、(3)「LRTがLRTであるための要件とは」正司健一（神

戸大学)、(4)「L R T推進活動に関するアンケート調査」波床正敏(大阪産業大学)、(5)「実現化にむけた主要な戦略」森脇 宏(地域計画建築研究所)、(6)「L R T導入にむけてのアプローチ」本田 豊(兵庫県)

■講演(ゲストスピーカー)／「21世紀のまちづくりとL R T」北村隆一(京都大学)

■パネルディスカッション／「L R Tによる都市づくりにむけて」／コーディネータ:塚本直幸(大阪産業大学)／パネリスト:北村隆一(京都大学)、宗田好史(京都府立大学)、永山邦明(伏見観光協会)、美濃部雄人(国土交通省)、正司健一(神戸大学)

実現化の戦略

成果報告の中の「実現化にむけた主要な戦略」は、内外の先進事例を講師を招いて学び、その具体的な教訓や課題を踏まえて取りまとめたもので、私が報告しました。特に、「望まし

いまちの将来像の提案と議論が取り組みの大前提」と強調し、「自治体の役割が決定的に大きく、その権限や財源を抜本的に強めるため、「(仮称)公共交通基本法」の制定」など、いくつかの提案を行いました。

取り組みの経緯と今後の予定

私とL R Tとの関係は、5年ほど前に、(社)日本都市計画学会関西支部の助成を受けたL R Tの研究会で事務局を務めたことから始まります。その後、そのときのメンバーを中心に、若干の再編を経て今回の取り組みに移行し、今日に至っています。

今後については、何らかの形で継続したいと考えておりますので、「次の取り組みの際には、声をかけてほしい」と思われる方は、ぜひ森脇までご連絡ください。

きんきょう

〔取締役会長／三輪 泰司〕

J I A(日本建築家協会)大会 2002 沖縄に参加してきました。宜野湾市にある沖縄コンベンション・センターをメイン会場に、10月10日は前夜祭。11日は朝から、W-0からW-14まで15のCPD-W(ワークショップ型継続職能研修)が一斉に始まり、午後大会式典の後、コージ・タイラ、イリノイ大学教授の基調講演「多系列都市論」に続きパネルディスカッション。夜は那覇のハーバービューホテルでレセプション。

J I Aは国際組織ですからアメリカ、タイ、シンガポールなど、海外からのお客さんが大勢来られました。副会長職を退任して1年になるのですが、たくさんの旧知、殊に地元沖縄の会員の皆さんにお会いできて、忙しくも楽しい日程でした。12～13日は、八重山諸島を訪ねて



約60名の参加で盛会であった講習会



フロア質問も受けたパネルディスカッション

のCPDに参加しました。

風土と技術と造形

沖縄訪問は4度目です。一番初めは1972年5月15日の本土復帰間もない8月、那覇の仲吉さんのお招きを受け、住研グループの長さんご一家と家族旅行をした時です。まだ交通が右側通行でした。

2度目は仕事からみで、同じ年の9月末、リゾート開発の候補地調査のため、宮古島から石垣島まで行きました。コバルトブルーの海のかなた、はるかにかすむ西表島を望み、訪ねてみたいと思いましたが、船の便がないとのことで諦めました。近寄り難い“秘境”でした。

最も近くは1987年2月、京都経済同友会の産業視察ですからもう15年前になります。この時は、嘉手納基地視察や、沖縄経済同友会との交流討論会など、充実していましたが忙しい訪問でした。

大会テーマ「基層の空間」に加え、私は豊かな自然とチャンプルー(ミックス)文化の「風土性」をテーマにしました。

今大会は「沖縄浪漫」と銘打っていました。沖縄の風土と社会をうんと学びたいと思いましたが、沖縄本島では研究会やレセプションが続いて、僅かな自由時間でしたが、ショッピングなものを見ました。

109号でご紹介しました「沖縄に電車が走る日」で、“ゆたか・はじめさん”が問題を提起されていましたモノレールが来年の開通へ向けて大方出来あがっています。どう見ても風土性とは異質で巨大な構造物が、那覇の街にのたうち廻っています。建築や土木など、空間的存在は人間の意識に働きかけます。

国際通に路面電車を走らせるには、膨大な権

利調整が立ちふさがり、大変な地域計画と技術開発の努力を要するでしょう。モノレールも、莫大な費用と労力を要したでしょう。さてどちらが「基層」となる都市空間という巨大な文化の価値を高めることになるのでしょうか。

八重山諸島ではややゆっくりと、30年前の思いを達することが出来ました。

期待の八重山

驚きましたね。いまや八重山には2つの船会社、石垣港から西表島へ高速船で1日37往復、僅か35分で結んでいます。西表島の大原には真新しい港の施設が出来ていました。観光バスも2社あります。人口は2,000人ほどで、路線バスは成り立たない。島の人の足はもっぱら自家用の船。集落は海岸よりの平地で、農業(米・砂糖黍・畜産)に頼っています。人間はジャングルを分け入って内陸部へ入らなかったの、イリオモテヤマネコが棲息する人跡未踏の自然が残ったのです。しかし、個体数は現在約200匹とか。人間社会の方も廃村となった集落が点在しています。13日は日曜日でしたが、学童数僅か9名の小学校では運動会の準備をしていました。

島の東北側、小浜島との間に由布島という地図では見えないくらい小さな島があります。ここが観光の拠点になっているわけは、約400メートルの浅い海を渡る水牛車と、素朴な熱帯植物園が売り物だからです。もともと水牛は70年前に台湾から農耕用に連れてこられたのが、お役ご免になったのを活用したというわけで、それがいまや島の名物。「大五郎・花子」を祖とする水牛一家のおかげと、今年2月に大きな碑を建てています。ほほえましさとともに生き物全てへの祖霊崇拜の精神を感じました。

何と、西表島に温泉が出てホテルが出来ていました。その昔、中継貿易の港があった高那という今は廃村となったあたりです。

離島の観光ビジネス

観光振興は地域計画の典型です。その原理・原則は、(1)今あるものを知り、守る、(2)それらを繋ぎ、結ぶ、(3)足りないものを加える、です。ビジネスとしては、通常、食材から労働力まで、資源はすべて現地調達できて外貨効率が高いのですが、離島・過疎地では特異な問題と、それが故の知恵があります。

離島の観光ビジネスに“足りないもの”は3つ。労働力・資金・運営ノウハウ。特異な問題3つ。地元若い人がいない。資金調達力が弱い。サービス業の経験が乏しい。

この逆手に行く知恵が水牛の活用。近年、沖縄らしさが残っていると人気の竹富島でも水牛車がゆったりと動いています。こちらは4輪の車、由布島は2輪の違いがありますが、動力エネルギーは現地調達。排気ガスも出さず、騒音も撒き散らしません。餌は現地の萱でOK。水牛の生産、調教、排泄処理等々、ハイテクに劣らない高度な技術を開発して土地の環境と社会に共生しています。

先を行く知恵

地域計画のプランニング・コンサルタントの道は、風土と結ぶ技術とデザインと考えています。今回、CPD-W10は、NEDO(新エネルギー・産業技術総合開発機構)と協働で行われましたように、新しいエネルギー形式と風土性を結ぶ「設計」は、これからの建築計画・地域計画の基層となるでしょう。

高那のホテルは立派すぎてストレスがたまりそうでした。それよりすぐ横に水量の安定した

小さな川は生かせるのではと思いました。京都事務所では大阪事務所の循環型社会チームの研究を受けて、バイオマス発電と小型水力発電の開発研究に取り組んでいます。エネルギーも適地適法の時代です。

労働力の知恵はフロリダのホリディインで見ました。ウエイトレスはかわいいエプロンをしたおばあちゃんでした。多分夫婦ともリタイアして暖かい所へ移り、年金暮らしをしているのでしょうか。昔ニューヨークあたりでウエイトレスをしていたのでしょうか、少々スローですが“昔とったきねづか”で、とつてもサービスがうまいのです。

ほかならぬ西表島です。基本コンセプトは環境と社会への共生に徹すると思っていますでしたが残念。残念がっているだけではないかので、現地で考えた意見も少々。

支援策を考える

港でJTBの人がアンケートを配っていました。大手旅行社に願いたいことがあります。第一はポリシーです。観光基本法の前文にも通ずることですが、地域振興3つの原理・原則によって、先ず現地の資源、特にかけがえのない自然・人文資源を守ること。量より質を目指すこと。行政の仕事は、環境管理計画を立て、入込み客数を規制すること。同じ国立公園区域である知床では環境省は「利用調整地区」を設け、立ち入り人数や滞在日数を定めて公開を検討しています。第二は、資金調達への支援。観光ビジネスは装置産業です。大きい投資を要します。第三は、人づくり。観光ビジネスとか観光デザインを掲げる大学があります。那覇空港のレストランなど、サービス教育はよく来ています。教育カリキュラムとサービス現場を“繋



ぐ”インターン・シップのシステムづくりに協力して頂きたいと思います。

華のあるサービス

実は、プランニング・コンサルタントもれっきとしたサービス業です。市場経済とはユーザー・オリエンテッド。お客さん第一。教育だってサービスです。こんにち大学でも学生から教員の演習・講義の評価を聞いて改善に努めています。高槻市の公営企業審議会—市バスの経営計画で、つまるところは市民サービスに徹することと答申したことを思い出します。最近、京都市バスでは、少しずつ女性ドライバーが増えています。ソフトなアナウンスは感じが良いです。ガイド・アナウンスは女声ですからおかしくないわけです。高槻では当時、そこまで気づかなかったのはうかつでした。

国民宿舎の類でうまく行かなくなったと診断を頼まれ、調べてみたことがあります。うまく行っているのは昔からの宿場町とか温泉場で、親から子へと伝わったサービスのところがあるところでした。それはマニュアルなどでなく、ごく自然な地域社会に生きづいている隣人愛・家族愛からにじみでるところでしょう。

さて、アルパック社員のサービス精神はいかがでしょう。第一線の受け付けは感じがよいでしょうか。



カジマヤー

今回最高の幸せは、石垣島で、「カジマヤー」の行列に出会ったことです。

のぼりを先頭に、棒術隊に、子供達の太鼓隊、三味線、鉦と鳴り物が続き、金色のオープンカーに赤い頭巾のおばあちゃん。マイクで沿道に呼びかけ、小さい風車など配りながら何十人もの行列。沖縄に伝わる97歳のお祝いだそうです。カジマヤーとは琉球方言で風車のこと。子供を象徴し、お年寄りが生まれ変わって幼児にもどるのです。カジマヤーは10月12日と決まっているそうです。旧暦の9月7日です。

ご祝儀に頂いたてぬぐいには、この日の主役、玉城喜美代さんのメッセージ。鶴亀・松竹梅に赤い風車もあります。おばあちゃんの長寿にあやかる、京ことばで言う「おすそわけ」を頂き幸せでした。

カジマヤーは地区の人たちが実行委員会をつくり、風車を作ったり、行進の練習をします。地区あげてのイベントのしめくくりは大宴会。費用は地区と家族が折半するのだそうです。

東洋には合理主義、競争原理などとは異質の価値観に立つ文化があります。沖縄には伝統的なヨコ型社会の人のつながり自然との共生を大切にすくらしが、遅く生きづいていました。



多摩ニュータウン発 市民ベンチャー
NPOぼんぼこ

○著者：NPOフュージョン長池
富永一夫

○発行：日本放送出版協会

最近、高度成長期に開発されたニュータウン（今ではシニアタウン又はオールドタウンか）において、人口減少や急激な高齢化・少子化、公的賃貸住宅のストック活用や再生、分譲マンションの大規模改修や建て替え、近隣センター等の空き店舗発生、小学校等の空き教室の発生や小児科等の休廃業、高齢者支援施設の不足等が社会問題化し始めています。

ニュータウン再生の方向に向けて、多世代定住に向けた機能の充実・多様化、まちの魅力化を図り、「快適で美しい自立生活都市」を再創造するために、特に地域の主体的な取り組み、NPO等の活動が重要であると指摘されています。その先進事例として紹介されるのが多摩ニュータウンで活動されている「NPOフュージョン長池」です。

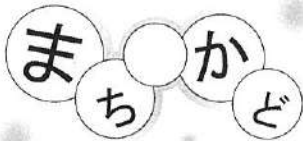
現在の様々な活動（例えば、高速インターネット仲介の多摩ニュータウンLAN（たまらん）

紹介者／大阪事務所 中塚 一

事業、住宅団地管理の住見隊事業、コーポラティブ住宅建設支援の夢見隊事業、コンサート事務局の祭再々事業、酪農家と連携したりサイクル事業、地元小学校の40日連続開放等（など）は、既に、色々な雑誌や講演会等で紹介されています。本書には「そもそもなぜサラリーマンがここまで地域活動に入り込んでいったのか?」「ボランティアとしての地域コミュニティ活動からNPO、コミュニティビジネスへとどのように展開していったのか?」「どのように様々な人々を巻き込んで大きなムーブメントになっていったのか?」等、実際に同じような活動を展開されている方々が悩んでいる課題を一つ一つ解決しながら活動を発展させてこられた奮闘記が現場感覚でリアルに描かれています。

「人生の最も重要な晩年を幸せに生き、そして、みごとに“サバサバ死ぬため”には、地域にこころ豊かな人間関係があることが重要であることに気づいた」という信念のもと「ぼんぼこな心」で「ぼんぼこな人々」のネットワークを築きながら、コミュニティビジネスとしての経営センスのあるNPOを展開されている筆者の熱気が伝わって、元気がもらえる一冊です。

追伸：活動の原点となったコミュニティ活動のビデオ上映会で放映されたスタジオ・ジブリ製作の多摩ニュータウンの宅地開発と戦う狸の奮闘記「平成狸合戦ぼんぼこ」も合わせて鑑賞していただくと、その後の筆者達の「ぼんぼこな活動」の熱意がより伝わってきます。



大洲のポコペン横丁

〔大阪事務所／鳴崎 雅嘉〕

レトロなまち大洲

先日、たおやかな肱川で繰り広げられる鶺鴒いや、ドラマ「おはなはん」の舞台として有名な、愛媛県大洲市を訪れました。

大洲の市街地には、おはなはんの舞台となった古い漆喰壁の建物が残り、その街並みを資源としたまちづくりが行われています。そして、このレトロなイメージを活かした市民の自主的な取組みが、この大洲で始まっています。

大洲赤レンガ館の裏にあるスペースで、毎月第3日曜日に広げられている「ポコペン横丁」という取組みです。昭和30年代の街並みをイメージした、仮設型チャレンジショップといった趣向で、雑貨屋さん、中華そば屋さん、コロッケ屋さんなどのお店が月に一度並びます。

ポコペン横丁の始まり

今回、そのポコペン横丁の発起人である大谷さんにお話を聞くことができました。毎年11月に開催されている「大洲浪漫祭」で大谷さんが、「手伝えることがあるのでは」と、市役所に相談したところ、「場所を貸すからおもしろいことをやって」と言われた事がポコペン横丁の始まりです。

実は、大谷さんは、レトログッズの収集をさ

れており、経営されている喫茶店「木人館」には所狭しとお宝が積み上げられています。その趣味と浪漫祭のテーマが重なり、大谷さんが、知り合い数人に声をかけ、立ち上がったのが「ポコペン横丁」です。登場したその年から浪漫祭の目玉スポットとして人気を博しました。**ポコペン横丁から学ぶこと**

ポコペン横丁の特徴は、なんと言ってもその「軽やかさ」と「柔軟性」、そして「肩肘張らない自由な雰囲気」。大谷さんも、「趣味の範囲でやっているからこそ、続けていられる」とのこと。出店をしている方々は、会社員、農協職員、スナック経営者など、多種多様な人達です。月1回のミーティングでは、楽しいアイデアが多く出され、「給食」をテーマにした特集を組んだことも。古いアルマイトの食器や、学校の古い机を譲り受け、鯨かつなどを振る舞ったところ、これがまた大人気。また、横町の真ん中には「保古辺神社」なるお社があり、ご神体はペコちゃん、おみくじは大洲弁という念の入れよう。こんな、楽しく自由なアイデアは、「好きでやっている」からこそだと感じます。

このポコペン横丁の取組みからは、「失敗をおそれない行動力」「新しい人を気軽に受け入れる開放性」「できることからすぐに始めるスピード感」「リピーターを飽きさせない継続的な工夫」「大きなテーマで柔らかく包み込む統一感」「自分達で汗をかく楽しさ、充実感」など、今の、中心市街地が抱える課題に対して、多くのことを指し示しているように感じます。

【ポコペン横丁ホームページ】

<http://user.shikoku.ne.jp/tdarling/>



アルパック (株) 地域計画建築研究所

・本 社

URL:<http://www.arpak.co.jp> E-mail:info@arpak.co.jp

京都事務所 〒600-8007 京都市下京区四條通り高倉西入ル立売西町82・大和銀行京都ビル6F/TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764

・大阪事務所 〒540-0001 大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F/TEL(06)6942-5732 FAX(06)6941-7478

・名古屋事務所 〒460-0008 名古屋市中区栄3-18-1・ナディアパークビジネスセンタービル13F/TEL(052)265-2401 FAX(052)249-3925

・東京事務所 〒186-0001 東京都国立市北1-1-17・田畑ビル3F/TEL(042)501-2531 FAX(042)501-3024 分室/TEL(03)3226-9130

・九州事務所 (株)よかネット 〒810-0001 福岡市中央区天神1-15-35・ホンダハビエ5F/TEL(092)731-7671 FAX(092)731-7673